

垣添忠生著『空と水の間—奥日光をめぐる十五章』

岩手医科大学 医学部泌尿器科学講座 藤岡 知昭



この本を手にしたとき、まず、題名が、ガストン・レビュファ著の写真集『天と地の間に』と響きが似ていると感じました。彼はアルプスの天才登山家で、その華麗としかいいようのない体の移動により垂直な岩壁・氷壁をよじ登る姿は、多くの登山家の目標で、学生時代、夏冬問わず登山・岩登りにばかり熱中していた小生にとりましてこの写真集はかけがえもない教科書でした。20数年前、本邦において、同名の記録映画が公開されましたが、その映画を今回紹介します『空と水の間—奥日光をめぐる十五章』の筆者である国立がんセンター総長の垣添忠生博士もご覧になっていたとは驚きです。小生は、以前より著者が空手の達人であることを承知していましたので、この本を読み始めまして、レビュファの優雅なロック・クライミングと著者の「蝶のように舞い、蜂のように刺す」という身のこなしのイメージが重なりました。また、奇遇なことに、著者がカヌーを入手されたところは、学生時代から地方に住む小生も登山用具等を購入していた同一の新大久保のアウトドアスポーツ店でした。欲しい物をやっと手に入れた腕白少年のような著者の一面を垣間見、著者に対し妙に親近感を感じ、一気に読み終えました。

カヌー漕艇やその学習を先生のように厳格にできるかどうかはわかりませんが、小生を含めた読者の皆様もカヌーを購入し、湖面を優雅にパドリングしたい気持ちになるのではと思います。

『空と水の間』は、都会生活の緊張からの「癒しの時間」を描くエッセイで、著者御夫妻が30年来、通い詰めた奥日光における、蝶、昆虫、鱒、猿と鹿などの野生動物・生物や滝、川、森林、紅

葉などの大自然や四季の移り変わり、そこで出会った人々、そして最愛のパートナーである奥様との時間を大切にしている気持ちが随所に溢れるように描かれています。しかしそればかりではありません。同じ泌尿器科医の後輩である小生は、著者が脱線部分と称されている医療、医学・研究の本體に関する記載により深く感銘し、医師として、研究者としてのあり方に関する多くの貴重な示唆をうけました。

小生が感じた特記すべき事項は、著者の「男の美学」です。先生のみだしなみの基本姿勢は、フランスまたはイタリア風であるとの方向性を伺い知ることができます。学会等で、ピンクやグリーンのシャツに鮮やかな黄色のタイを身に付けた、目を引く著者をお見かけすることが多々あります。これはパリから留学生を通して学ばれた「ファッションは、けだし恥ずかしさを振り切る、一種の挑戦である」という哲学よるものであったのかと納得しました。また、著者は、同年齢の米国メーヨー・クリニック泌尿器科学、ロバート・マイヤー教授らとともに「1948年クラブ」を創立し継続させているとのこと。その入会には、人品、容姿、言語能力の厳しい資格審査があるということですので、著者の美を追及する基本姿勢が納得できます。いつも一寸の隙も見せず颯爽と闊歩され、もし必要な場合があれば、瞬時に一撃で倒す侍の雰囲気か漂っている訳も理解できます。また、主として男体山・奥白根山登山で描かれている著者と奥様のあいだで繰り広げられる、愛するもの・弱いものに対する深い思いやり・男の優しさにはユーモアさえあり、誰もが著者のように優しい一面も持ち合わせたいものだと思うに違い

ありません。

本年4月、東京お台場において、東京女子医科大学泌尿器科学教室の東間紘教授を会長としまして、第93回日本泌尿器科学会総会が開催されました。そのシンポジウムの1つに「泌尿器科研究者をどのように育てるか—若手泌尿器科医に研究は必要か?—」が企画され、僭越ながら小生も参加しました。この課題は、泌尿器科のみならず臨床各科においても共通に直面する重要な問題であると考えます。著者は、自分の基礎研究経験より、研究魅力を「未知の事実を発見する喜び」「問題解決の喜び」と本書のなかで結論づけており、「それは一種の麻薬であり、世界にこんな素晴らしいものがあるかとのめり込んだ」こと、また、研究の意味する事柄・研究の成因としては、1.「人間の考えることの限界と、摂理の意味深さ」、2.「日常の、研究者による注意深い観察」、3.「自分の立てた仮説に固執しない」と要約されるとし、ご自身は「緻密な観察、発想の勝利といえる研究」を好まれ、「そのような研究を聞くとときは胸が躍る」と述べておられます。このことは、小生をはじめ後輩医師に対するかけがえのないメッセージであり、先に述べたシンポジウムの適切な回答であると考えます。

また、医療事故やインフォームドコンセントに関する経験や提言も述べられており、医師として常に冷静な姿とともに人間性溢れる著者の一面にも触れることができます。

近年の小生にとりまして、『空と水の間に—奥日光をめぐる十五章』は、『天と地の間に』に置き換わるかけがえのない一冊です。多くの皆様の通読を推奨します。

